

平成29年度千葉県公立高等学校入学者選抜方法等改善協議会専門部会（論点整理）

I 選抜を1本化するという声が出てきた背景の整理

- ・高校側、中学校側ともに1本化を望む意見が多い。
- ・高校側、中学校側ともに入試の長期化で授業確保が難しくなっている。
- ・中学校は最後の1か月くらい授業を前倒しして終わりにしないと、前期選抜に間に合わない。
- ・高校は1、2年生の年明けの授業が確保できず、生徒が落ち着いて学習に取り組めない。
- ・高校校長協会のアンケートでは9割以上が入学者選抜制度の改善が必要であると回答している。中学校長会でも調査した結果、7割程度が1本化を望んでいる。2月に授業ができないのはデメリットであるとの意見がある。
- ・前期選抜でも後期選抜でも同様に学力検査を行うことから、前期選抜と後期選抜の違いが分かりにくくなり、1本化の声が出てきた。
- ・前期選抜で不合格となった生徒の6割が、後期選抜でもう1回同じ学校を受けている状況がある。前期選抜で不合格、後期選抜で合格としていることから、「1回でいい」という高校側の意見になっているのではないか。
- ・その学校に行きたい子をわざわざ1回は不合格とする必要はないことから、1本化でよいという意見が出ている。
- ・生徒は1月はじめから3月の初旬まで2か月強の間、精神的負担を抱えて生活しているため、1本化すれば、少なくとも2月の中旬からスタートして受験期間を短くできる。
- ・前期選抜で合格した子たちは、勉強に目が向かなくなる。前期選抜で不合格となった生徒は後期選抜の結果発表までの間、辛く不安な2週間を味わっている。
- ・中学校では前期選抜でチャレンジを促すような指導はしていない。学習塾の指導や保護者の意向によってチャレンジする子が多いのではないか。前期選抜は60%の定員枠であるため倍率が高く、学力水準も高くなり、チャレンジしたとしても、結局入るところはチャレンジ校ではない子が多い。
- ・郡部では都市部と違って選択肢が少ない。結局、前・後期選抜で同じ学校を受検する子が多い。
- ・郡部では学校が周りにあまりないので、前期選抜で何とか決めようと安全策を取る生徒が多い。本来行きたいところではなく、入れるところに行っている状況がある。

II 意向調査の結果について

1. 複数回を望む理由について

- ・前期選抜・後期選抜の2回あれば、1回目で第1志望の学校にチャレンジできると考える生徒が多い。
- ・前期選抜の動向を見て、後期選抜の受検校を慎重に選択することができる。
- ・前期選抜でけがや病気があった場合でも、複数回受検する機会を確保することができる。
- ・1回の入試だと緊張してしまうので、2回目で慣れが出てようやく実力が発揮できたりするのではないかという意見がある。1回チャレンジできる、1回練習できる等、単純に2回チャンスあるという考えも多いのではないか。
- ・経済的に苦しい場合はどうしても公立に行かせたいため、複数回を希望している声も多いのではないか。
- ・1年生より2・3年生の方が1本化を望む数が少ないのは、受検から時間が経って大学受験が見えてきているので、大学受験で1回しか受けられないとしたら困る、といったイメージが多少影響しているのではないか。

2. 1回を望む理由について

- ・本当に進学したい志願者が集まる。
- ・後期でランクを下げる者がいるため、本当に入学したい志願者が合格できない。
- ・前期合格者と後期合格者に学力格差が生じる。
- ・1本化を支持する理由としては、2回の選抜を合わせれば結局定員の100%が合格するので、無理に定員を6:4に分けなくてもいいし、1回の方がわかりやすくてよい、という考え方からではないか。
- ・結局、最終的に合格できる人数は変わらないから、1回の方がわかりやすくていいといった意見もあった。

3. 集計結果の捉え方について

- ・回答している生徒の意識に差があり、集計結果は数字だけで判断できない部分もある。
- ・前期選抜は倍率が3倍くらいあり、不合格の生徒が圧倒的に多い学校もある。
- ・1回だったら合格しているのにという意見もあれば、前期選抜で不合格になったから、後期選抜があつてよかったという意見もある。前期・後期選抜で結果的に同じ高校を受検した生徒でも、どう受け取るかは分かれていて、なかなか意見を単純に分類できない。
- ・後期選抜で合格した生徒がどう受け取るかというのは、後期選抜を生徒がどう捉えていたかによって変わってきてしまう。
- ・2回の受検機会をうまく使えている生徒とそうでない生徒の差は精神的なものだと思う。
- ・自分が経験した制度がいいと思う傾向はどうしてもあると思う。1本化・複数回、両方受けた生徒はいない。自分が経験した複数回受検を勧める数が増えてしまうのは仕方がないのではないか。
- ・「複数回がよい」という意見が多いのは、複数回受検で合格した生徒が入学しているので、現状がいいというのが第一にある。
- ・受検をする際、1回では自分の実力が発揮できないと思う理由は、体調や試験の内容が考えられ、その為、2回がよいというように思ったのではないか。
- ・現在の入試制度は、前期選抜は様々な尺度で選抜できるように、後期選抜は学力で選抜できるようにとやってきている。しかし、その認識があまりない。
- ・保護者としては、自分の子どもの万が一のことを考えて、怪我やインフルエンザで1回目が受けられなかったときに2回目のチャンスがないのでは困ると思ってしまうのではないか。

4. 「チャレンジ」について

- ・前期・後期と複数の受検機会すなわちチャンスがあることから、チャレンジが可能となっており、前期・後期と難易度の異なる高校を受検できる実状がある。
- ・前期選抜の志願校を決定する際に「チャレンジ」がキーワードとなっている。
- ・「チャレンジ」という言葉の捉え方が、1本化を望む人と複数回を望む人ではまったく異なっている。
- ・1本化を望む理由として、チャレンジをあまり肯定的に捉えておらず、「無謀な挑戦はしなくていいのではないのか」など、肯定的に捉えていない。
- ・ネームバリューだけでレベルの高い学校にチャレンジする子がいる。
- ・生徒の学力に対して、難しいと思われる場合でも、受検しない方がよいという指導はしていない。
- ・難易度が高い学校であっても、その受検が勉強するモチベーションにつながるのであれば、チャレンジする意義はある。しかし、ある段階で、自らの学力を客観的に理解させ、自分に合った学校選びの指導をすることも大切である。
- ・受検機会が2回あることから前期選抜を模試的な意味でとらえるということは、現行入試制度の意図とは違うと考える。

- ・進路の選択にあたっては、自分の定めた目標にチャレンジするために、しっかりと学ぶことが本来の姿であると考えます。
- ・中学校の進路指導においては、生徒がどのような高校生活を送りたいと考えているのか、その実現のためにはどのような選択をしたらよいのかを指導することが大切である。したがって、チャレンジには、あまり重きを置いていない。

III 今後の改善策について

1. 本県ではどのような制度の変更が考えられるのか

- ・これまで学校独自で特色を出してきたので、特色化の理念を継承していく必要はあると思う。前期選抜制度のシステムをより拡充した形のもので、よい方法に改良できればよいのではないかと。
- ・学力検査だけだと点数による輪切りになる。高校の序列化、偏差値教育に戻る。学力検査と特色ある選抜の入試制度が残った形がよい。
- ・学力、点数だけでなく、生徒を多面的に評価する方法を考えたい。前期でやっているような二日目の高校の独自性のあるものを引き継いで検討したい。
- ・多面的なやり方が可能な制度であり、かつ透明度が担保されるような方がよい。
- ・現行制度で指摘されている課題を解決するための方策として、特色化の理念を継承できる形で一本化することを考えたい。
- ・学力選抜だけでなく、様々な中学校時代の活動も加味した形での選抜システムを、1回の選抜の中で検討できるようにしていきたい。
- ・特色化選抜の流れを汲む前期選抜制度のシステムを、より拡充した形のもので、1本化した方がよいのではないかと考える。

2. 検討すべき事項について

- ・募集定員が100%であれば合格していたのに、2回やることによって1回目の倍率が上がって合格水準が高くなり、1回目は不合格になる可能性が増えるということをしっかりと伝え、1回の方が入りやすいことを理解させていけば、「1回がいい」という意見ももっと増えるのではないかと。
- ・1本化ということを考えるのであれば、「複数回がよい」とする考えに対して、できるだけ不安を取り除いていくことが大事である。
- ・チャレンジという趣旨が成立しているのかどうか、現行の複数化の制度を維持する大事なポイントである。
- ・高大接続改革が進んでおり、大学の入学者選抜も様々な尺度を取り入れた選抜方法をやっていかなければならない方向で進んでいるので、今まで千葉県がやってきたことを後退させてはいけな。2回の選抜の違いがあまり認識されていないのであれば、1回の選抜の中でそういったものを実現できるようにしていくのがよいのではないかと。
- ・海外帰国生徒、外国人、成人、連携型高等学校の特別入学者選抜、定時制の課程、地域連携アクティブスクール、通信制課程の入学者選抜 についても新たな仕組みの中で併せてそれぞれの特色等を生かした選抜制度を考えなければならない。

3. 1本化した場合に予想される利点と課題について

(1) 利点

- ・受検を2回やらなくていいことから負担が減る。
- ・中学のまとめがしっかりとできた上で進学できる。
- ・中学校、高校ともに授業時数を確保できるとともに、2・3月の学校行事などへの影響も少なくなる。
- ・約40%の受検生が必ず一度は不合格を経験しなければならない状況が解消される。
- ・試験の時期を遅くすることが可能となる。
- ・受検校を決定する時間を十分に確保できる。
- ・第一志望の受検に集中してじっくりと学習に取り組める期間を長くすることができる。
- ・教職員の業務上の多忙化が解消される。

(2) 課題

- ・生徒・保護者から出された不安の声に丁寧に対応していく必要がある。
- ・入試の内容は、多面的によい面を評価できるような制度を構築する必要がある。
- ・各校で選抜方法を考える際に、受検生に混乱をきたさないようにする。

4. 制度変更の際に必要な周知期間はどうかあるべきか。

- ・方針を公表した後、中学校の在学期間に相当する程度の周知期間が必要ではないか。
- ・高校側に各校の特色を出させるような制度にするのであれば、学校内でその議論を積み上げていく必要があり、高校でも一定の準備期間が必要となる。

5. 私学との関係

- ・公立高校が1回の入試になった場合、中学生の学習活動・学習時間がしっかりと確保できることが大切なので、私学にも一緒に考えていただきたい。私学の入試時期が遅くならず現行のままでは、結局中学校は私学の入試までに勉強を終わらせなければならないため、現行とあまり変わらなくなってしまふ。
- ・経済的な理由で複数化の望んでいる保護者については、私学＝高いという意識がある保護者がまだまだ多いからではないか。私学受検に対しては、就学支援や減免制度などを利用すれば、私学も昔ほど高いという訳ではないということを、保護者に丁寧に説明して理解してもらうことが必要である。三者面談や進路の説明会で、就学支援や減免などの制度や私学の説明等をするだけでは費用が高いというイメージはなかなか覆らない。受検生を支えるのは保護者なので、子どもたちには保護者によく相談するようにと面談では話しているが、「公立1本で私学は無理だ」という親の強い意見があるという話をよく聞く。制度を周知させれば、親の気持ちも変わってくると思う。